



図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授	神田秀夫	奈良国立文化 財研究所長	坪井清足	学習院大 学教授	黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授	伊藤 博	成城大 学教授	上原 和	学習院大 学教授	黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大学 助教授	小島瓊禮	奈良国立 博物館	上原昭一	東京大学 助教授	笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大学 助教授	久保田 淳	美術 史家	白畑よし	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子 大学教授	片桐洋一	大和文 華館	伊藤敏子	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	明治大 学教授	木村正中	美術 史家	白畑よし	東京大 学教授	土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大 学教授	秋山 虔	東京大 学教授	秋山光和	東京大 学教授	土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田大 学教授	国東文麿	美術 史家	梅津次郎	京都女子 大学教授	村井康彦
第9巻／平家物語	清泉女子 大学教授	永積安明	大阪大 学教授	武田恒夫	京都大 学教授	上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女子 大学助教授	三木紀人	東京国立文 化財研究所	宮 次男	東京大学 助教授	益田 宗
第11巻／太平記	早稲田大 学教授	梶原正昭	東京国立文 化財研究所	宮 次男	京都大 学教授	上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大 学教授	小山弘志	京都国立 博物館	切畑 健	大阪市立 大学教授	原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究 資料館長	市古貞次	東京国立 博物館	高崎富士彦	東北大学 名誉教授	豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授	白石悌三	文化 庁	佐々木丞平	学習院大 学長	児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授	長谷川 強	東京大 学教授	山根有三	学習院大 学長	児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学習院女子短 期大学教授	諏訪春雄	大阪大学 助教授	信多純一	横浜市立 大学教授	辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究 資料館教授	松田 修	東京国立文 化財研究所	河野元昭	学習院大 学教授	大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大 学教授	神保五弥	名古屋大 学講師	小林 忠	立正大 学教授	北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授	水野 稔	国立国会 図書館	鈴木重三	東京学芸大 学助教授	竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大 学教授	郡司正勝	名古屋大 学講師	小林 忠	成城大 学教授	西山松之助

図説日本の古典 7 源氏物語

昭和53年1月20日 初版第1刷印刷

昭和53年2月3日 初版第1刷発行

著者代表——秋山 虔 ©1978

発行者——堀内末男

発行者——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)230-6171

出版部 東京(03)230-6351

振替—15653/郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙／カラー 王子製紙株式会社

モノクロ 日本パルプ工業株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。

0391-167007-3041

Printed in Japan

源氏物語



集英社

図説日本の古典 7

〈企画委員〉

東京大学教授 秋山 虔

国文学研究資料館長 市古貞次

学習院大学長 児玉幸多

早稲田大学教授 神保五弥

東京大学教授 山根有三

〈第七巻・編集委員〉

東京大学教授 秋山 虔

東京大学教授 秋山光和

東京大学教授 土田直鎮

目次

●カラー図版●『源氏物語絵巻』・「御法」詞書第一紙・「東屋(一)」部分・「竹河(一)」部分／浄瑠璃寺本堂／平等院鳳凰堂／『紫式部日記絵巻』藤田本第四段部分／白描絵入「浮舟」冊子第二図／源氏絵扇面散屏風／源氏物語図屏風「関屋」貝合せ／『源氏物語』の古写本

『源氏物語』の世界 秋山 虔

『源氏物語』の原像について 『源氏物語』を生む文学伝統 『源氏物語』の達成

●図版特集●

『源氏物語絵巻』 秋山光和

「若紫」「蓬生」「関屋」「柏木(一)」「柏木(二)」「横笛」「鈴虫(一)」「鈴虫(二)」「夕霧」「御法」
「竹河(一)」「竹河(二)」「橘姫」「早蕨」「宿木(一)」「宿木(二)」「宿木(三)」「東屋(一)」「東屋(二)」

『源氏物語』―作品鑑賞 篠原昭二

光源氏の出発 運命の饗宴 流離と栄光 生ける仏の御国 六条院の風景 六条院崩潰 幻の世
霧ふたがる宇治の里 女の運命

『源氏絵の系譜』 秋山光和

『源氏物語』と絵画 王朝の源氏絵 鎌倉時代の動向 室町時代の源氏絵
近世初頭の新展開(一)―土佐派の細密源氏絵― 近世初頭の新展開(二)―大画面源氏絵の創造― むすび

「若紫」図残欠と『源氏物語絵巻』 秋山光和

『源氏物語』の和歌をめぐって 秋山 虔

和歌は仮構の現実を開く 詠歌の許されぬ人 和歌空間の造成の意味
和歌詠作の余韻 和歌の表現的射程について 儀礼の歌に形象されるもの

紫式部の生涯―源語作者の肖像 伊藤 博

虚像と実像と 少女・娘・寡婦―女流作家の形成― 宮廷生活の波間で

●図版特集●

『紫式部日記絵巻』 秋山光和

日野原本第三段／五島本第一段／藤田本第五段／五島本第四段部分／藤田本第三段

161

『源氏物語』の読者たち―鑑賞と研究の歴史 伊井春樹
本文の対立と解釈 別伝の物語 『源氏物語』の効用と評価

168

藤原道長の世界―時代背景・I 土田直鎮
道長の躍進 道長の極盛と摂関政治 道長とその周辺

130

●図版特集●

平等院と浄土美術 田口栄一

平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像／平等院鳳凰堂／同内部／下品上生図部分／阿弥陀聖衆来迎図／
浄瑠璃寺本堂の九体阿弥陀像／阿弥陀浄土变相図／阿弥陀三尊像

193

『源氏物語』と浄土思想 速水 侑
序 浄土信仰の発達 密教と浄土教 『往生要集』と浄土教

200

摂関家の衰勢―時代背景・II 土田直鎮
摂関家の推移 末法の世

212

『源氏物語』年立 鈴木日出男

221

『源氏物語』関係系図 鈴木日出男

224

『源氏物語』人物事典 鈴木日出男

224

凡例

- 1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、各図版の解説に、その部分の執筆者があつたが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。
- 2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによつたが、古文あるいは特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。
- 3 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。
- 4 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は略させていただいた。
- 5 本巻の図版写真および資料の収集にあつては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第七巻・執筆者〉

東京大学教授	秋山光和
東京大学教授	秋山 虔
東京大学助教授	篠原昭二
中央大学教授	伊藤 博
国文学研究資料館助教授	伊井春樹
東京大学教授	土田直鎮
東京大学	田口栄一
東海大学教授	速水 侑
東京学芸大学助教授	鈴木日出男

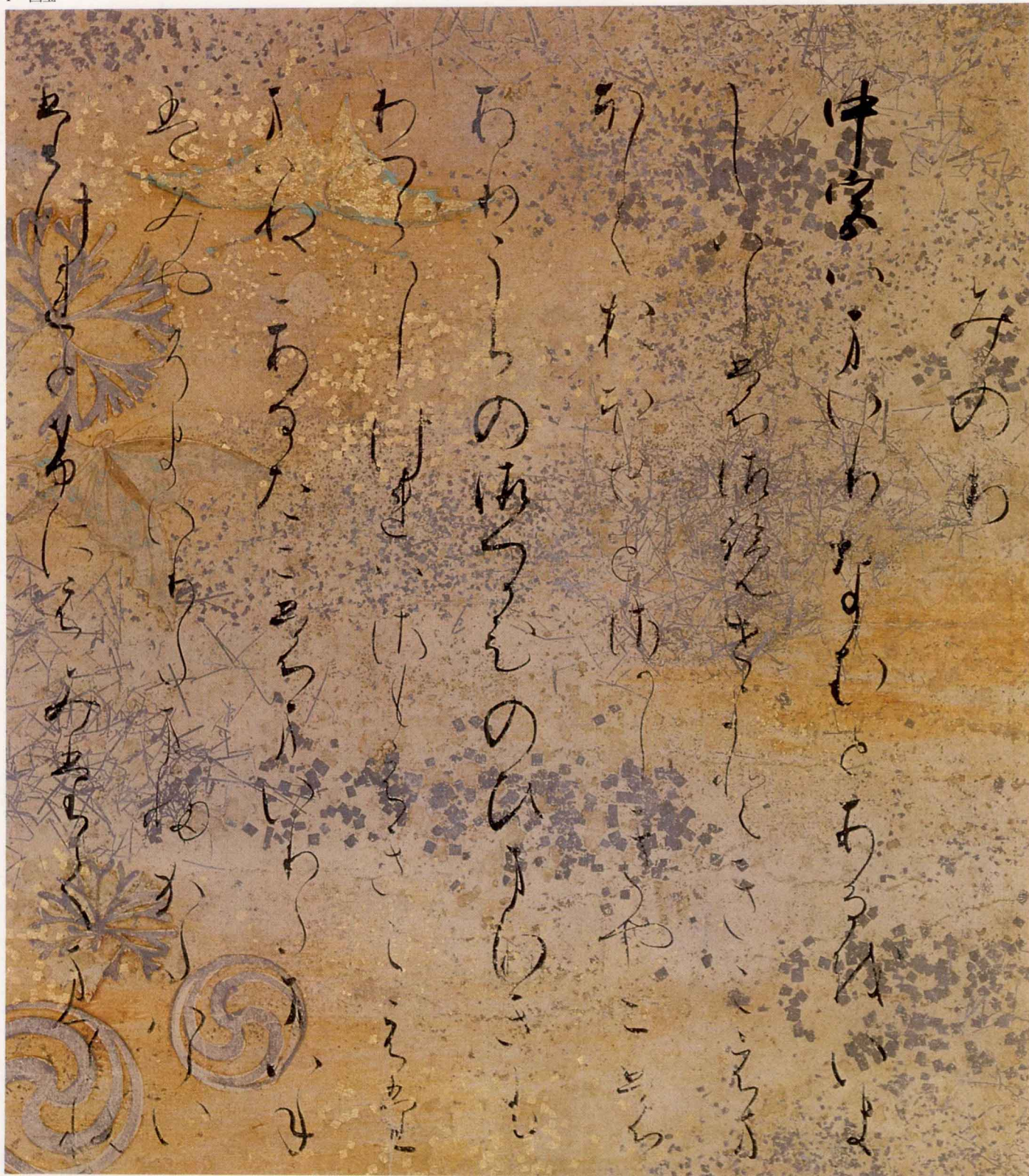
〈装幀〉

後藤市三

レイアウト

宇喜多邦嘉

樋口英男



1 「御法」詞書第一紙〈『源氏物語絵巻』〉
 —徳川・五島本『源氏物語絵巻』は、各画面の美しさばかりでなく、これに付けられた詞書(ことばがき)の文字から料紙の装飾まで、すべてこまやかな配慮のもとに制作され、みごとな調和と統一を保っている。ことに「柏木」から「御法」までの一群の書風は、11世紀以来の品格ある上代様の正系に立ち流麗な連綿体(れんめんたい)の

快いリズムによって鑑賞者を惹き込む。さらに料紙はさまざまな色でぼかし、金銀の切箔(きりはく)、砂子(すなご)、野毛(のげ)などを散らし、手描きや型抜き(うけぬき)の文様を自由に配し、変化の妙をみせる。この「御法」第一紙は、尾長巴(おながどもえ)、海松(みる)、蝶などを型抜きし、中央の蝶は型紙を貼ったまま上から彩色するなど、ひときわはなやかである。／東京都・五島美術館

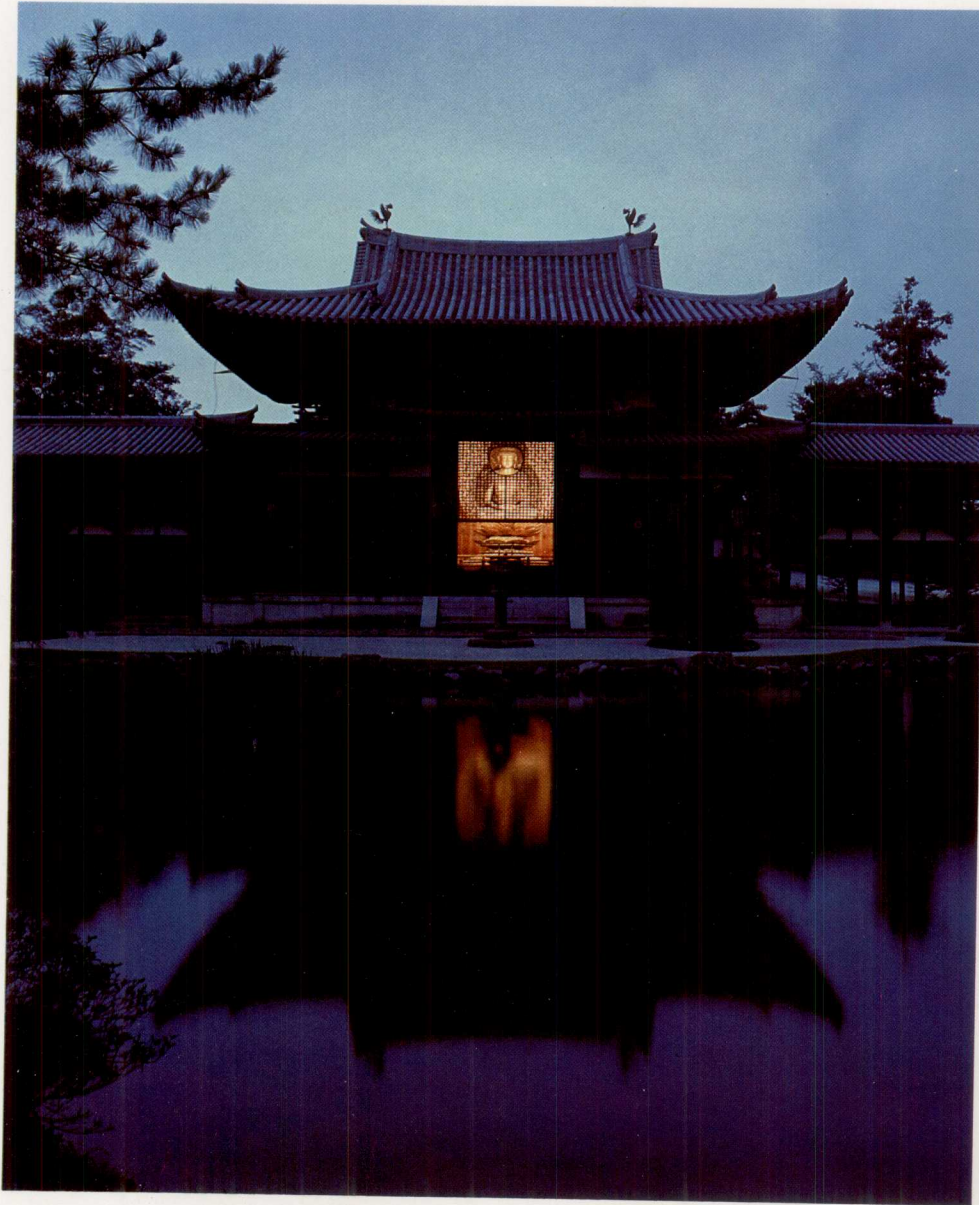




2 物語絵に見入る浮舟〈『源氏物語絵巻』東屋(一)部分拡大〉——異母姉にあたる宇治の中の君の心づくして、美しい物語絵の冊子を拡げてみる可憐な浮舟。この図の下にあたる部分で、侍女の右近が別冊になった本文を読みきかせており、平安時代における鑑賞法の一例を眼のあたりさせてくれる。なお浮舟の白い顔は鉛白で厚く塗った上に、細かい墨線で眼鼻や毛髪を描きおこしているが、その筆緻(ひっち)は「柏木」や「鈴虫」の諸段に比べるとやや粗(あ)らく、画家の相違をよく示している。(49図参照)／東京都・徳川黎明会

3 薫と宰相の君〈『源氏物語絵巻』竹河(一)部分拡大〉——玉鬘(たまかずら)の邸を訪れ念誦堂(ねんずどう)の戸口に腰を下す若い薫のあで姿である。女房たちはその清純さに惹かれ、庭前の若木の梅になぞらえて、たわむれの歌をおくる。中でも宰相(さいしろう)の君という女房は御簾越しに「少し色めけ梅の初花」と詠みかけ、薫もこれに返歌する。(41図参照)／東京都・徳川黎明会





5 たそがれの鳳凰堂——池をへだてた鳳凰堂の真正面、かつて小御所(こごしよ)と呼ばれる礼拝所の建っていたあたりから、暮れかかる西空に浮き出す御堂を眺めるのはまことに幻想的である。堂内の照明に、本尊の阿弥陀如来は金色に輝き、扉口の空間にびったりと組みこまれる。さらに犬防(いぬふせぎ)の格子にかけられた円窓に、慈悲円満の尊顔が程よくおさまリ、礼拝者の視線を温かく受けとめたことも理解されよう。1053年。宇治市宇治蓮華町平等院。(227図参照)



4 浄瑠璃寺本堂——閑寂な山中の池畔に、夢幻的なたずまいを見せるこの堂は、平安時代後期に流行した九体(くたい)阿弥陀堂の唯一の遺構として重要である。阿弥陀像を9体安置するため間口11間、奥行4間(25.3m×9.1m)の長大な、しかし落ちつきのよい建物である。「浄瑠璃寺流記(るき)」の記載とあわせ考えると、11世紀の小規模な阿弥陀堂を12世紀初めに九体堂に改造したかとも思われるが、なお定説をみない。本堂前の池も最近洲浜などが復原され、王朝の景観をしのばせてくれる。11～12世紀。／京都府相楽郡加茂町





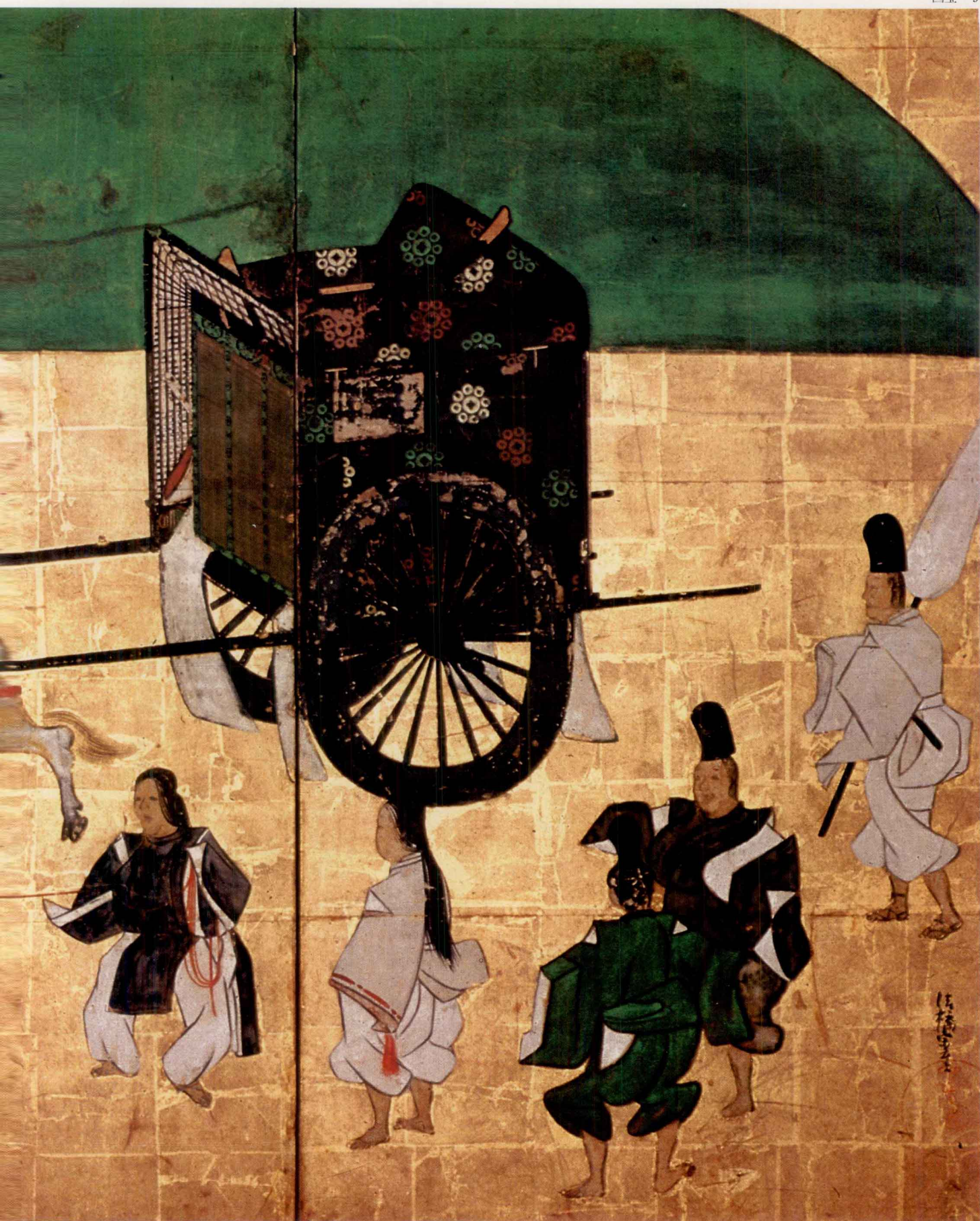
7 白描絵入「浮舟」冊子・第2図——冊子本の現22丁裏と23丁表とを示す。右ページの白描插图は、薫からの来信を前に、匂宮との秘密になやみ、返事を書きあぐねる浮舟の姿を描く。なお22丁の表は白紙のまま残されているので、物語の本文は21丁裏からこの23丁表へと書きつがれ、丁度絵に表現された箇所が記されている。1節のみを抄出した絵巻の詞書と異なり、全文を書写した物語本文と挿絵の関係をよく知ることができる。縦23.8cm。各ページ横18.6cm。13世紀。／奈良県・大和文華館

6 御産養の夜の女房<『紫式部日記絵巻』藤田本第四段>部分拡大——寛弘5年(1008)9月11日、一条天皇の中宮として時めく藤原彰子(しょうし)は、父道長の土御門邸でめでたく皇子敦成(あつひら)親王を出産した。この段は7日目の公儀の御産養(うぶやしなひ)の夜、疲れてまどろむ中宮の高貴な姿に紫式部が感動する場面。ここには右端の女房を拡大図で示す。女房達の白装束に浮織りされた文様は、銀地に鉛白で描き出されていたが、細線な白線が淡紫色に変化して、微妙な効果を生ずることとなった。延命にちなむ菊の流れを描いた障子絵もすっきりして、この絵巻らしい斬新な美を見せている。縦21.0cm。13世紀。／大阪府・藤田美術館





8 源氏絵扇面散屏風・左隻——扇面のまとまった源氏絵として時代も古く、図様の上でも注目すべきものは尾道の古利浄土寺に伝わるこの60面のセットである。6曲屏風1双の各扇に5面づつ、自由な配置で貼りまぜられ、屏風の地紙には風に翻える緑の葛の葉を描いて図様をまとめている。60面の選び方は1帖1図ではなく、同じ帖から数場面を取ったものもあり、43帖分にあたっている。屏風上の配置も物語の順序を追わず、各場面に含まれた季節の景物でまとめて、右隻右端から左隻左端まで春夏秋冬の順に従っているのは注目される。この左隻には、右上端の「野分」からはじめて秋と冬の情景が類集配置された。各扇面を縁どる金雲の上には、画面に対応する物語の一節や和歌が墨書されている。(121図解説参照) 縦155.0cm。横364.4cm。15～16世紀。／広島県・浄土寺



9 「閑屋」部分(宗達筆『源氏物語図屏風』)——近世初頭の大画面源氏絵において、最も目ざましい創造をなしとげた宗達の『源氏物語図屏風』右隻、「閑屋」(130-A図)の部分である。同時代の他の屏風絵や色紙絵などを超えて、これを徳川・五島本『源氏物語絵巻』の同じ場面(32図)と比べあわすとき、500年を隔てて蘇える源氏絵の新しい生命を感じとれよう。屏風の左側(130-A図参照)、閑屋の奥に轅(ながえ)をおろす空蟬の車に対し、前景を静かに進む源氏の一行が、力強い構図の軸線をつくる。空蟬の文をもち牛車に歩みよる小君。金地に浮き出す安定のよい形態と色彩の組み合わせが、背後の丘陵の、大胆な緑の色面で見事に引き締められている。／東京都・静嘉堂

